学校だより青南 夏休み号

令和 4 年 7 月 20 日
港区立青南小学校
校長　野口　直樹

ぼくの夏休み【昭和の話】

校長　野口　直樹

小学5年生の野口少年の夏休みは、7 月 20 日の下校後から始まります。前日に揃えた、旅支度（といっても、肌着やシャツなど数日分を鞄に詰めただけ）を携え、上野駅へ向かいます。妹を連れての二人旅、気持ちも引き締まります。切符を買うにも、緊張感が走ります。上野発の東北本線に乗って宇都宮へ、そこからローカル線で烏山という小さな町へ、そこが私の母の故郷、旅の目的地です。私は、そこで、夏休みが終わるまで過ごしていました。

母の田舎での生活、都会を離れ、地元の子どもとして過ごすことは、とても楽しいものでした。やることは、毎年決まっていました。カブトムシ捕り、川遊び、ちょこっと勉強、日曜やお盆休みは、田舎の叔父さんに、日光や那須高原、おやま遊園地などの観光地に連れて行ってもらっていました。

そんな夏休み一番楽しかったのは、カブトムシ捕りでした。朝早く起き、山に分け入り自分たちが仕掛けたワナ（蜂蜜をただ木に塗ったもの）を見に行き、果たしてカブトムシは捕獲できるのかワクワクしながら向かいます。たいていは、コガネムシ、ガ、チョウチョ等が群がっており、カブトムシはいないことが多かったのですが、カブトムシがいたときの嬉しさは、それこそ天にも舞い上がる感じでした。

また、密かに楽しみにしていたことは、スイカを食べることでした。母屋の隣にある、井戸にスイカを入れ、夜の縁側で食べていました。夜空を眺めながら、妹やいとこたちと次の日のことを話しながら食べるデザートは最高でした。

小学校卒業まで、このような夏休みを過ごしていました。チャイムのならない 40 日余り、クマザサをかき分け登る山道、家のそばの川での水遊び等々、それらを、当時の私たちは、何がだめで、どうすればよいのかを判断しながら過ごしていました。そこには、都会からやってきた私たちと一緒に遊んでくれた、年長者の存在がありました。年長者は、代替わりを重ね小学6年生の頃は、私もその年長者の一人になっていました。年長者のやるべきことは多く、その日の「スケジュールの提案」、「スケジュールは、一番小さい子でもやれるのか」、「それは、自分だけでなくみんな楽しいのか」などなど、それまでの先輩たちがやっていたことをなぞるように行っていました。もちろん、遊び始めてこれは違うとなれば、予定の変更は随時行っていました。

ここでの学びは、大きくなるにつれ役に立ったと思っています。当時の私は、学びとは少しも思っていなかったと考えますが、そのように過ごさせてくれた母親に感謝をしています。

ともあれ、無事故で子どもたちにとって楽しい夏休みとなり、9 月 1 日には全員元気に学校で会えることを願っています。